

クルマと社会が調和する次世代環境車，新型 CLARITY FUEL CELL のデザイン

Design of Next-generation Environmental Vehicle CLARITY FUEL CELL,
realizing Harmony between Vehicles and Society

矢口 史 浩*

Fumihito YAGUCHI

佐原 健*

Ken SAHARA

小林 慧*

Kei KOBAYASHI

富田 沙 希*

Saki TOMITA

要 旨

新型 CLARITY FUEL CELL は、世界で初めてリース販売された FCX から第3世代目にあたる燃料電池自動車である。開発においては世界最高のゼロエミッション環境性能を実現するだけでなく、セダンの美しいたゞまいや実用性と高い質感をしっかりと持たせた商品を目指した。

パッケージデザインのコンセプトに「BOLD & AERO PACKAGE」を掲げ、空力性能に優れた低全高と居住空間を両立させた。これを基に、エクステリアのコンセプトは「BOLD & AERO」とし、ロー＆ワイドなプロポーションで堂々とした車格と先進的で美しい流線型デザインを実現した。また、インテリアのコンセプトは「Advanced Modern Lounge」とし、先進テクノロジーと心が満たされる空間との調和を実現した。そしてカラーマテリアルコンセプトは今までの環境車のイメージを一新させる新しいラグジュアリーな世界観を表現した「FUTURE LUXURY」と定めた。これらにより CLARITY FUEL CELL の新しい商品魅力を創出した。

ABSTRACT

The new model CLARITY FUEL CELL is the third generation of the FCX fuel cell vehicle, which was the world's first fuel cell vehicle made available for lease. In addition to the world's highest level of environmental performance (zero emissions), the development of the new vehicle sought to realize both the aesthetic form and practicality of a sedan, and a sense of luxury.

The concept for the new package design was “BOLD & AERO PACKAGE”, balancing a low total height for aerodynamic performance with a roomy interior space. Based on this vision, the concept for the exterior of the vehicle was “BOLD & AERO.” For the exterior, the development realized an imposing body through the use of low and wide proportions combined with an advanced and aesthetic streamlined design. The concept for the interior was “Advanced Modern Lounge”. The interior design realized harmony between advanced technology and a satisfying interior space. “FUTURE LUXURY” was set as the concept for the color and materials employed in the vehicle, expressing a new vision of luxury that redefines the image of environmental vehicles. These elements have realized a new level of commercial appeal for the CLARITY FUEL CELL.

1. はじめに

2008年に発表したFCX CLARITY(先代クラリティ)(Fig. 1)は、大気汚染、温暖化、化石資源の枯渇など、環境問題の解決に向けて量産化を見据えた燃料電池システムを開発し、乗用車としての普及を目指した。従来の燃料電池自動車(Fuel Cell Vehicle: FCV)のイメージを一新させたセダンデザインが与えられ、燃料電池(Fuel Cell: FC)をセンタコンソールに配置することで4名乗車を可能とした。

新型燃料電池自動車 CLARITY FUEL CELL(新型

CLARITY)は、革新的なパッケージ技術により小型化したFCスタックをフロントフード下に収めた。この技術により広々とした快適な室内空間を実現し、5名乗車が可能となったことは先代クラリティから大きく進化した点のひとつである。

我々は単に環境にやさしいだけではお客様に納得していただけないと考えた。必要なのはクルマとしての魅力が備わっていることである。魅力とは、美しさと優れた走行性能、使い勝手、そしてアッパーミドルの車格感である。これらを追求したセダンスタイルが、新型 CLARITY の魅力

*四輪 R&D センター



Fig. 1 2008 model year FCX CLARITY



Fig. 2 Grand concept

を表現できると考えた。

この想いから生まれた新型 CLARITY のグランドコンセプトは「Red Carpet to the New Era」である (Fig. 2)。究極の環境性能とアッパーミドルセダンの魅力を融合することで新しい価値を生み出せると考えた。この価値をユニークなデザインによりお客様の気持ちに応えることが我々のテーマである。

2. パッケージデザイン

2.1. パッケージコンセプト

新型 CLARITY のパッケージデザインでは、前述のグランドコンセプトをかたちにするために二つの商品価値を追求した。

一つ目の価値は FCV を所有することに満足感や誇りを感じさせる車格感である。環境性能だけではなくクルマとして魅力的な商品であるために、アコードなどのアッパーミドルセダンと比較しても立派に見えるスタイルや快適性が必要だと考えた。

もう一つの価値は FCV トップクラスの航続可能距離である。2016 年時点で利用できる水素ステーションの数はガソリンスタンドと比べると限られるため、FCV の所

有者にとって一度の水素充填でより長い航続距離を確保することが重要である。空力性能を骨格から磨き上げることでこの価値を達成したいと考えた。これら二つの価値を両立させるパッケージコンセプトが「BOLD & AERO PACKAGE」(Fig. 3) である。外装からも内装からも感じられる車格感を BOLD と表し、高効率な空力性能と両立させた次世代 FCV を目指した。

2.2. 快適性とセダン全高

新型 CLARITY にはアッパーミドルクラスの車格感を与えるため、大人 5 人が快適に過ごせる室内空間を提供した。また一般的にアップライトな乗車姿勢を採用するコンパクトクラスの乗用車と比べて明確な違いが感じられるように、セダンらしい乗車姿勢と全高であることを目標とした。

5 名乗車を実現するために先代クラリティがセンタコンソール内に配置していた FC スタックを小型化し Voltage Control Unit (VCU) と共にフロントフード下へ収めることで FC パワートレインを V6 エンジン相当の大きさに集約した。この変更によって後席に対してセンタコンソールの後部やフロアトンネルが大きく突出することがなくなり、乗車定員を先代クラリティの 4 名から 5 名に増やすことができた。また、大人 5 人が乗車しても快適な空間とするた

めに、2013年モデルのアコードと同等の前後席空間距離と1450 mm以上の後席ショルダー룸を確保した。

次に、セダンらしい乗車姿勢と全高を実現するために、駆動用のバッテリーをフロア下のスペースに搭載しながら、かかとを置くエリアのフロアと前席のヒップポイントを低く配置した。

バッテリーパック形状や周囲のボデー骨格を工夫することで、フロアの高さ方向の突出を抑えた。また前席のシートフレームとフロアの間隔を短縮することで、前席下のスペースに効率よく駆動用バッテリーを搭載しながら、ヒールとヒップポイントの高低差を265 mm以下とし、セダンのような運転姿勢と、1475 mmの全高を実現することができた (Fig. 4)。また、前席シートフレームとフロアの間隔が少ないと、後席の乗員の足がシートの下に入らず後席の居住性が損なわれる。そこでバッテリーの配置を前席の足引き性が確保できる範囲でフロント側に寄せ、バッテリーパックの形状と前席シート下部形状は後席乗員のつま先に配慮することでボリュームを抑えた。さらに通常は前席下のフロ

アに配置するリヤヒータダクトをセンタコンソール側に移動させることで、後席の快適性と低い前席の運転姿勢を両立させた。

2.3. ハイデッキセダン骨格

FCV トップクラスの航続距離を確保するために基本骨格から空力性能の向上を目指した。空力性能上有利な紡すい形のなめらかなキャビンシルエットと、快適な居住空間を両立させるため、トランクリッドを高く配置した特徴的なセダン骨格 (ハイデッキセダン骨格) を採用した。このハイデッキセダン骨格により、通常のセダンよりもリヤガラスを大きく傾斜させた紡すい形のルーフデザインを採用しても、十分なヘッドクリアランスを確保することができた。

さらに新型 CLARITY では、後席下に小さな高圧水素タンク、トランク床下に大きな高圧水素タンクを配置するレイアウトを採用すると同時に 70 MPa へ高圧化し、水素搭載量を先代クラリティより 33% 増やした。通常のセダン骨格ではトランクスペースが大きく削られてしまうが、ハイ

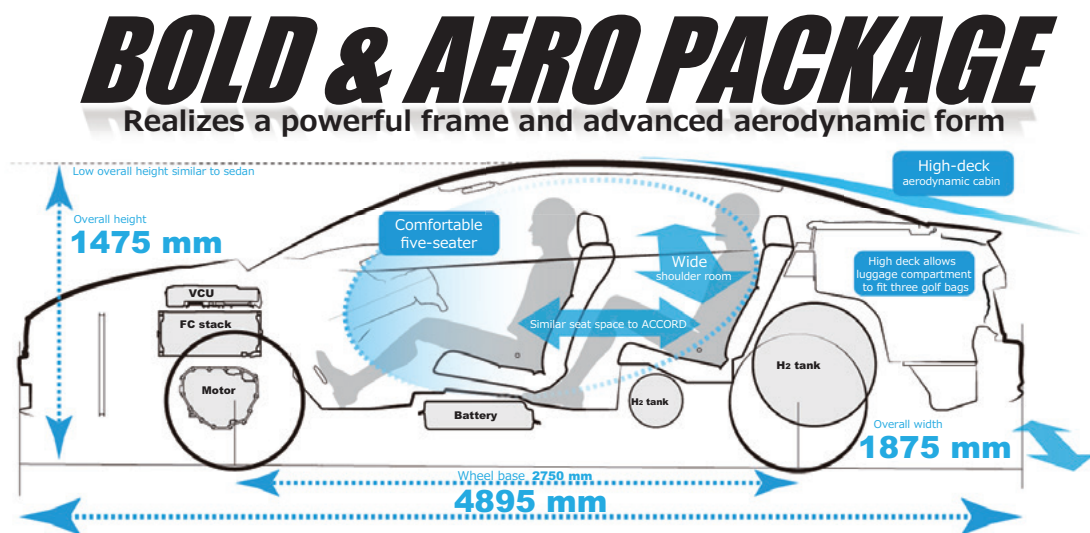


Fig. 3 Image of package concept (North American model)

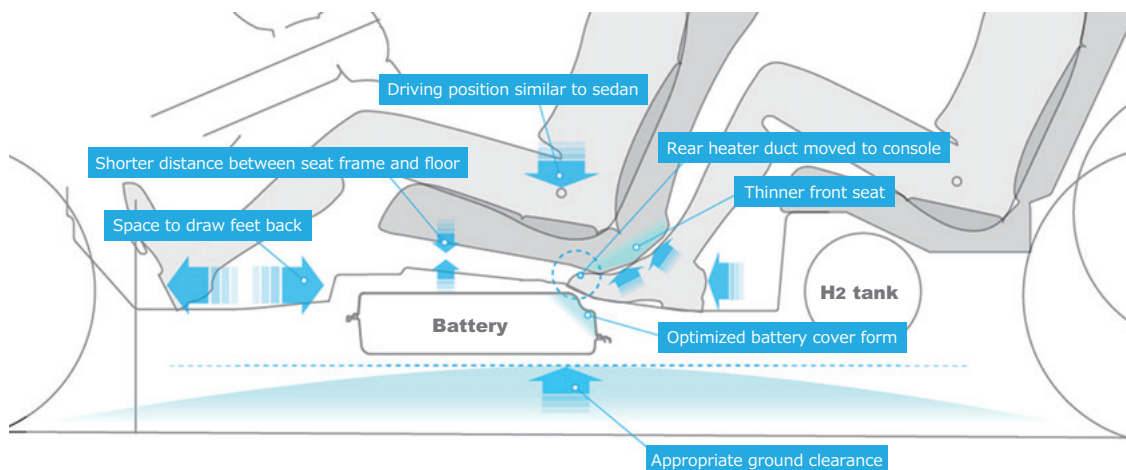


Fig. 4 Details of battery and floor layout

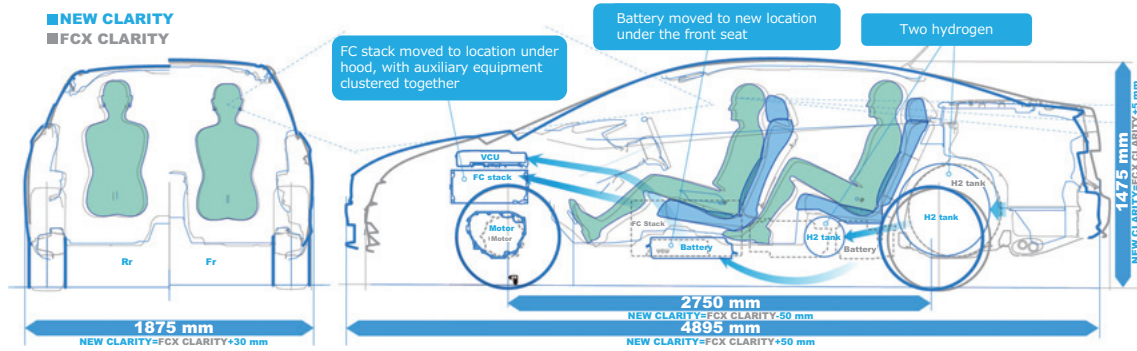


Fig. 5 Comparison of CLARITY package layout

デッキセダン骨格の採用によってトランクスペースの容量を天地方向で増やし、トランクの開口寸法も上下に大きく確保することが可能になった。

これらの工夫により、先代クラリティに対して水素搭載量を増やしつつ、9.5 インチのゴルフバッグであれば3個、29 インチの旅行かばんであれば二つ積むことができる荷室を実現した (Fig. 5)。

2.4. 空力性能と後方視界の両立

ハイデッキセダン骨格の採用によって高くなったトランクリッドが、後方視界の妨げにならないよう配慮した。新型 CLARITY では、後席シートバックの後ろとトランクリッドに配置した二枚の小窓を通して、後方の見下ろし方向の視界を補うことができるエクストラウィンドウを採用した。同じエクストラウィンドウ形式の先代クラリティよりもリヤウィンドウとエクストラウィンドウの間の死角が少なくなるように、リヤスポイラの位置や形状を最適化した。また、斜め後方の視認性も向上させるため、先代クラリティには無かったリヤクォータウィンドウを加えた6 ライト形式とした。これらの工夫は視界の向上だけではなく

車室内の採光にも寄与し、明るく開放的な室内はキャビンが寸法以上に広く快適に感じられる効果をもたらした。

3. エクステリアデザイン

3.1. コンセプト

新型 CLARITY のエクステリアは「BOLD & AERO」をコンセプトに掲げ、セダンとしての堂々としたたたずまいと先進的で美しいエアロダイナミックなスタイルの実現を目標としてデザインをおこなった (Fig. 6)。

3.2. 流麗なキャビンと力強いボデー

キャビンのデザインは世界初の5人乗り FC セダンとして居住性と視界を守りながら先進性と美しさを表現するため、サイドビューではクーペのようなスリークなシルエットとした。また、リヤクォータガラスを大きくとりピラーとルーフをブラックアウトすることで、ガラスキャノピーのような広々とした先進的なデザインを表現した。

プランビューでは B ピラー付近でのガラスの丸みを強め外側に出すことによって、室内空間を拡大しながら豊か



Fig. 6 Exterior design concept

な絞込みの見える美しいキャビン形状を実現した (Fig. 7)。

ボデーサイドは堂々としたセダンのたたずまいを表現するため豊かな抑揚のある造形とし、環境車としてはスポーティな 18 インチホイールを採用した。また、リヤ周りはパッケージ由来のハイデッキを大型スポイラで引き締めることによって、シャープで力強いボデーを作り上げた。

こうして作られた流麗なキャビンと力強いボデーを組み合わせ、新時代の FC セダンデザインの基礎ができた (Fig. 8)。

3.3. 空力性能を高めた骨格とディテール

航続距離の確保が課題である FCV にとって、エクステリアデザインによる空力性能の向上は重要である。一般的にセダンは空力に優れるが、新型 CLARITY ではさらなる空力性能向上をねらい、開発の初期から骨格を空力に最適化したデザインをおこなった。

通常のセダンは A ピラーに起因する縦渦がリヤで発生する C ピラー渦とぶつかる点で乱流が起き、それが誘導抵抗となり空力性能が低下する。それに対し新型 CLARITY では A ピラーの位置と傾斜、ピラー表面の丸み、ガラスとの段差を考慮し、A ピラー渦を少なくした。また、C ピラー付近では通常のセダンよりもリヤドアガラスを寝かせながら絞り込むと共に C ピラー下端を後方に移動させることによって、C ピラー渦も低減させた。また C ピラー渦を上面に回り込ませず後方に流すスタイリングをサイドからリヤスポイラに施すことで誘導抵抗を大きく軽減させた。このような取り組みにより、高い空力ポテンシャルを持つ骨

格ができた (Fig. 9)。

基本の骨格で築いた空力ポテンシャルを、さらに発揮させるのがディテールのデザインである。

フロントバンパ下部とリヤドア後部に設けられたエアカーテンには、タイヤから発生する乱流を抑制する効果があり、特にリヤドアのエアカーテンはセダンとして例を見ない試みであった。通常セダンのリヤドアの後端とタイヤハウスの間にはボデーのアウタパネルがあり空気が抜ける構造ではない。新型 CLARITY はリヤドアがリヤホイールハウスの前側までカバーする構造とし、その部分にトンネル形状の樹脂パーツ (Fig. 10) を取り付けることで、リヤドアのトンネルから導入された空気がリヤタイヤの外側を通り、タイヤから発生する乱流を抑えた (Fig. 11)。

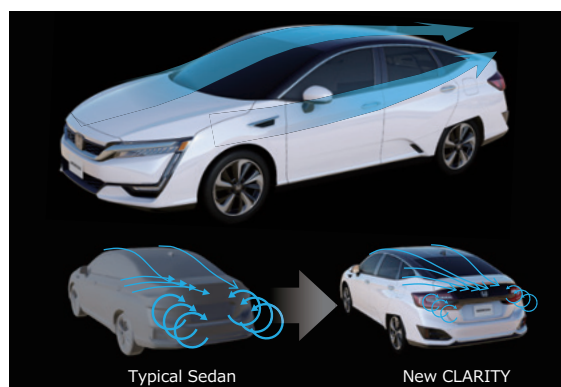


Fig. 9 Image of aerodynamic styling performance

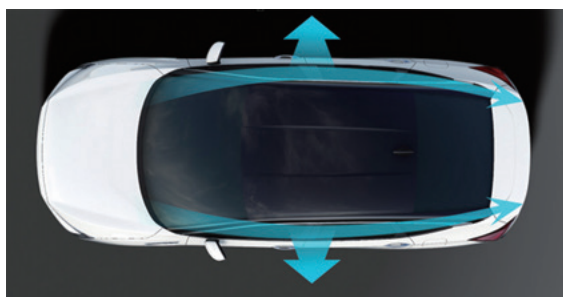


Fig. 7 Top view of exterior design

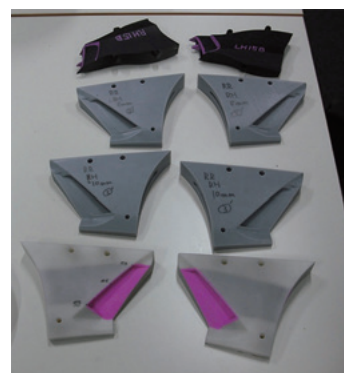


Fig. 10 Study of air curtains



Fig. 8 Exterior design sketch

リヤタイヤ上部にかかるタイヤカバーは新型 CLARITY のサイドの中でも特徴的なデザインである。リヤタイヤは全面的にカバーすることで空力性能を大きく向上させることが可能である。しかし、全幅に対しトレッドが内側に入ることによってリヤビューから見た際のスタンスが弱々しくなるなどの理由から通常のセダンには用いられない手法であった。新型 CLARITY では、タイヤからの乱流を抑えるのに最も効果的なタイヤの上部前側のみをサイドパネルアウトでカバーすることで、後付けのカバーがなくワイドなトレッドも保ったまま乱流を抑えた (Fig. 12)。

新型 CLARITY では、全体のボデー形状からディテールのパーツまで、まずデザイナーが形状を作り、次に空力エンジニアが空力シミュレーション (Computational Fluid Dynamics: CFD) をかけて、空力性能の向上の方向性を検証した。その結果をクレイモデルに反映してモデル風洞でテストするプロセスを繰り返すことによって、一充填走行距離 (参考値) 約 750 km を達成する空力性能の高いデザインを完成させた (Fig. 13)。

3.4. 先進的なフロントフェイスと美しさを重視したリヤコンビネーションランプ

Honda のフロントデザインのアイデンティティである



Fig. 11 Wind tunnel experiment

「SOLID WING FACE」(Fig. 14) を、最新のテクノロジーで表現したのが新型 CLARITY のフロントフェイスである。

フロントグリルはフロントフードの先端が鋭角に回り込むデザインにし、クロームモールの中央部分を押し下げることで低くシャープなノーズを表現した。また、グリルとヘッドライト内部のクロームモールを連続的につなげ、その上下にフル LED の薄型ターンシグナルとインラインタイプのハイとロービームを配置することで、ワイドで先進的な表情を実現した (Fig. 15)。ヘッドライトからバンパ下部まで大きく L 字型に回り込む Daytime Running Light (DRL) は、特徴的な見た目だけでなく昼間でも遠方から視認できるという安全思想が生んだデザインである。

リヤコンビネーションランプは先代クラリティから受け継いだエクストラウィンドウと統合されたグラフィックに収め、ワイドで一体感のある特徴的なデザインとした。視認性の良さとともに点灯時の光り方の美しさを重視し、通



Fig. 13 Mass production model



Fig. 14 Honda Solid wing face image

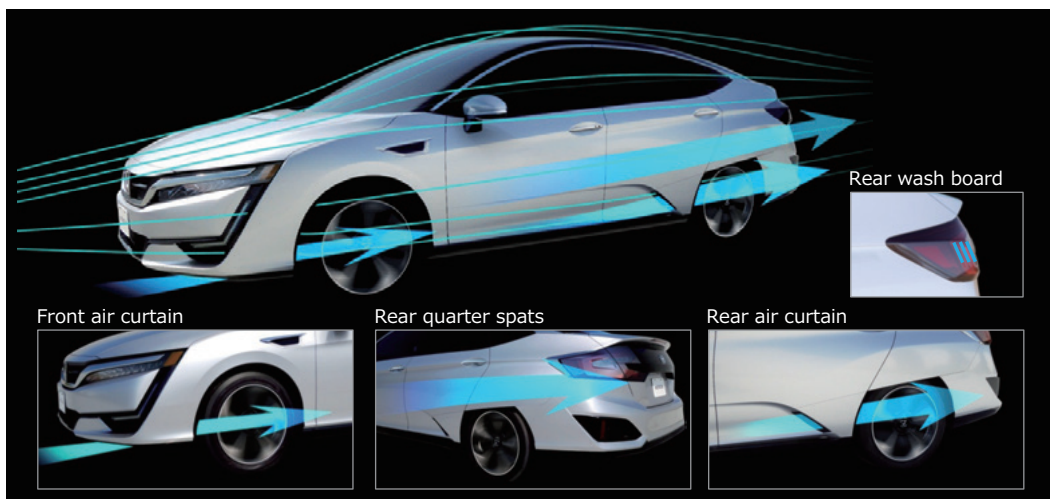


Fig. 12 Aerodynamic features

常より厚いインナレンズに間接光を反射させることによってガラスの塊のような外観を実現した (Fig. 16).

3.5. 機能とデザイン性を併せ持つハイブリッドホイール

新型 CLARITY は堂々としたセダンの車格を表現するため、先代クラリティに対し2インチ大きい18インチホイールを採用した。

環境車のホイールは開口面積を少なくして空力性能を上げ、小さな外径のディッシュタイプにすることで軽量化し航続距離に寄与するのが一般的である。しかし電動の自動車はエンブレブレーキの機構が無いため、連続して坂を下る場合のブレーキ冷却が課題となり、ホイール開口の拡大が必要である。新型 CLARITY のホイールは、大径でありながら軽量、冷却性能と空力性能の並立という課題を達成するため、大開口のアルミホイールで軽量化と冷却性能を達成しながら、樹脂製のカバーによって空力性能を高めた。その結果、先進的なデザインのハイブリッドホイール (Fig. 17) ができた。

ベースとなるアルミホイール本体は、車両重量に見合った強度を持ちながら軽量で成立する形状をベースに、樹脂カバーで隠れない部分に限定したデザインをおこなうことによって、デザインが要求するアルミ重量を削減した。

樹脂製のカバーはCFD (Fig. 18) をおこないホイール内に入り込む空気の流れを遮断しながらも、ホイール内の熱を排出する開口を回転方向に確保し、空力性能と冷却性能の両立を達成した。

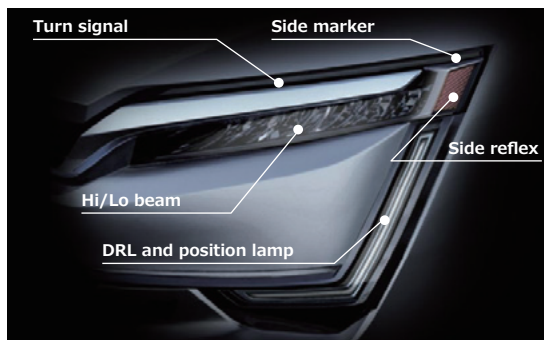


Fig. 15 Full LED head light

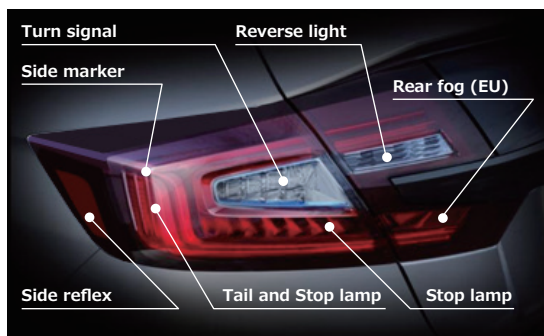


Fig. 16 Rear combination lamp

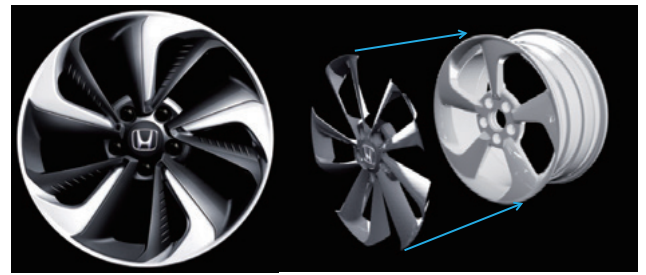


Fig. 17 Hybrid wheel

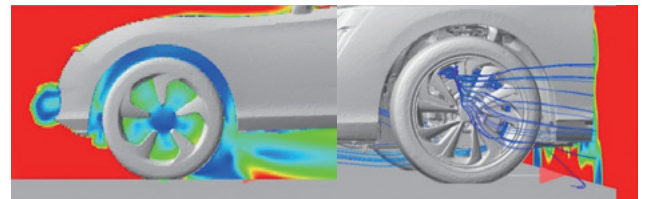


Fig. 18 CFD air flow simulation

4. インテリアデザイン

4.1. コンセプト

インテリアデザインコンセプトは「Advanced Modern Lounge」とした (Fig. 19)。これはHondaの考える瞬間認知、直感操作の設計思想に基づいた先進的なインタフェースの採用と、感性に訴えかける素材で構成した空間との調和を図ることで、心が満たされるインテリアを作り出せると考えた。

4.2. くつろぎの空間構成

心が満たされるくつろぎの空間を創出するため、インストルメントパネル中央からドアにかけて、左右方向の伸びやかな広がりをもたらし水平を意識した構成とした。これに加え前後方向に段差を設けることで奥行き感をもたらし、寸法以上に広々と感じられる空間とした。

インストルメントパネルとドアトリム上部には、しっかりとやわらかなソフトパッドを採用し質感を追求した。乗員が常に触れたり視界に入る部位に、ぬくもりのある素材と丁寧に縫製されたやわらかく肌ざわりの良い上質な素材を配置することで感性に響く居心地の良さを表現した (Fig. 20)。

インストルメントパネルの前後方向の段差 (Fig. 21) は、空間構成において重要な役割を果たしている。下段の奥行き寸法が短かすぎると狭い印象になり、拡大しすぎると広がりを感じるがエアコン吹き出し口のノブに手が届かなくなり機能が阻害される。このことから逆スラント形状にすることでノブに手が届く位置をキープし、下端を前方側へ拡大し両立を図った。クレイモデルやパッケージモデルで検証をおこない、奥行き寸法を115 mm とすることで広々と

した印象を感じさせ、なおかつノブに手が届く最適な寸法であるという結論に至った。

シートはゆったりと身を委ねられしっかりと体を受け止めるハイバックを採用した。これは背もたれが肩から背中を覆うことで安心感を与え、長時間安定した姿勢で座れるデザインである。さらに上すぼまり形状にすることで後席の乗員に圧迫感を与えず、座った状態から背もたれのショルダ部分でセンタディスプレイが隠れることのない配慮をおこなった (Fig. 22)。

4.3. 機能的なセンタコンソール

先代クラリティではセンタコンソール内に FC スタックがレイアウトされていたが、革新的なパッケージ技術によりフロントフード下に移動した。この空間を有効活用するために考案したのがハイデッキコンソール (Fig. 23) である。

小型化されたスイッチ式 Shift By Wire (SBW) と Electric Parking Brake (EPB) を操作しやすい高さに配置したことで下段にユーティリティ空間を確保した。スマートフォンやタブレット端末の置き場として充電を可能と

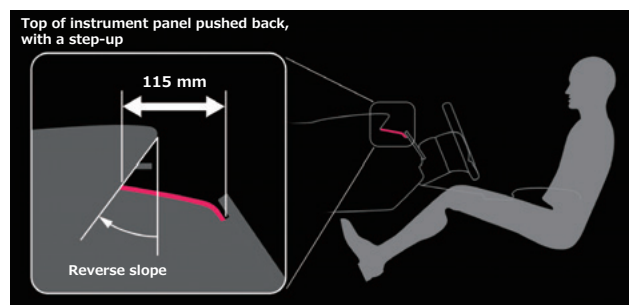


Fig. 21 Instrument panel design

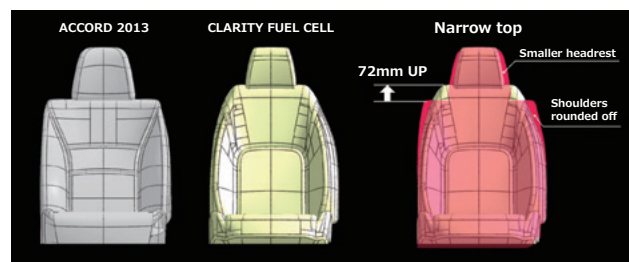


Fig. 22 Front seat design

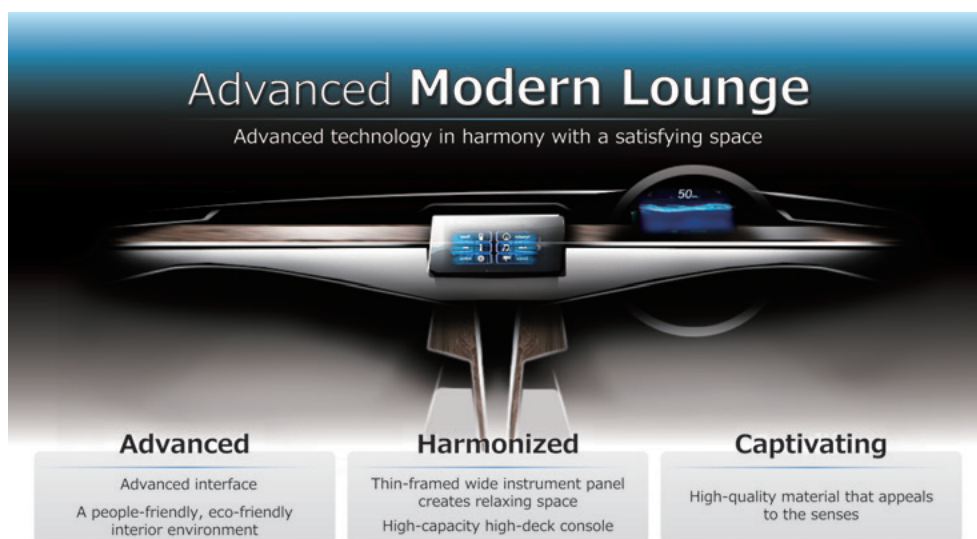


Fig. 19 Interior design concept

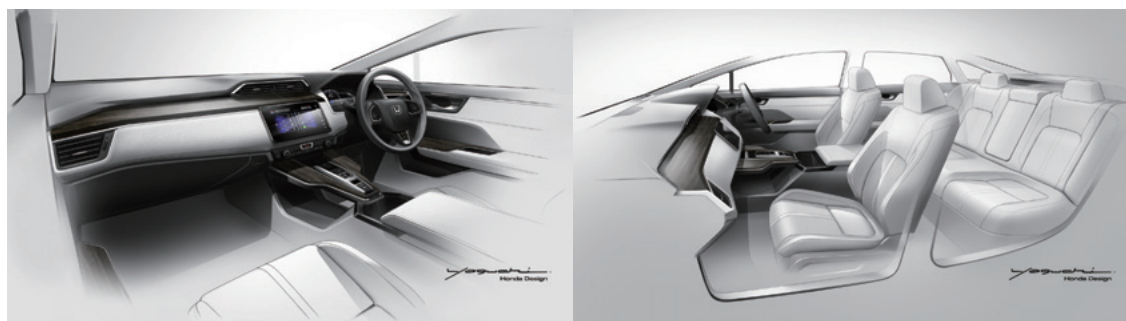


Fig. 20 Interior design sketch

し、座ったまま下段トレイにアクセスができるデザインとした。また走行中に空調操作をスムーズにおこなえるリストレストを兼ねる機能も付加し、お客様の気持ちに応える新しい使い勝手を提供した。

4.4. 先進的なインターフェース

瞬間認知、直感操作の設計思想に基づき、Honda の最新インターフェースデバイスを採用した。運転に集中できる環境をつくりだした (Fig. 24)。

メータデザインは中央に多彩な表現が可能となる大型液晶ディスプレイを採用し、シンプルなグラフィックと色を用いて情報を整理して表示した。

Fuel cell power monitor (Fig. 25) は、青いボールの縮小と拡大で水素の消費量を直感的なビジュアルで表現した。また、円弧状に表示する Power/charge (Fig. 26) は、電力の総出力と回生を示すと共に、走行に使用される電力源を同時に示す。常に変化するシステムの状況を針の動きで瞬時に読み取れる工夫されたグラフィックである。

さらにディスプレイを取り囲むようにシルバーのフレームを付加することで情報を区分し、整理することで視認性を高めた。このフレームは残量インジケータとフレームとの余白を認識させることで (Fig. 27)、残量を一瞬にして読み取ることができる様なデザインとした。

4.5. 素材を生かした造形

従来インテリアデザインの開発は形状に加飾を当てはめる傾向があった。近年は要素技術が進化し、実在の素材ではありえない表現も可能である。しかし形状に不自然な加飾を当てはめることが質感の低下を招いていると感じていた。

新型 CLARITY は素材からおのずとできあがる形状を重視してデザインを進めた。たとえばシルバー塗装部品は、金属を削りだしたような硬質な造形を表現した。また木目パネルは木材を薄くスライスしたものを基材に貼り込む、突き板仕上げと同様の手法を参考にして形状をつくりだした。素材の特性や作り方を研究することで質感を大幅に向上させ、インテリアコンセプトに掲げた、心が満たされる空間を実現した (Fig. 28)。



Fig. 24 Interface design

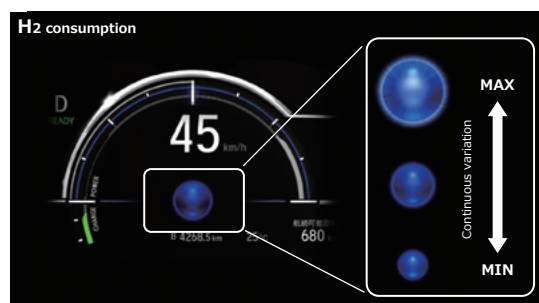


Fig. 25 Fuel cell power monitor

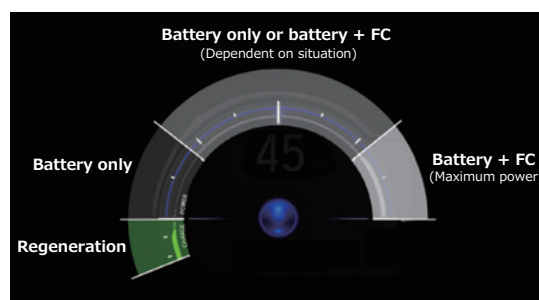


Fig. 26 Power/charge indicator

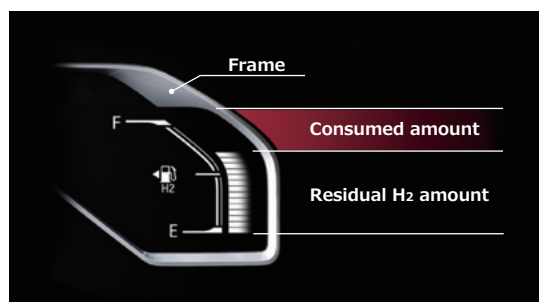


Fig. 27 Display integrated with frame and indicator



Fig. 23 Console design (Mock-up model)



Fig. 28 Mass production model

5. カラーマテリアルデザイン

5.1. コンセプト

カラーマテリアルデザインが目指したのは、環境配慮と所有感を満たすセダンとしての上質感を両立させることである。どちらか一方という従来の環境車やセダンの考え方ではなく、その両方を併せ持つことが、新しい時代のラグジュアリーな価値と考え、「FUTURE LUXURY」をコンセプトに掲げた。

5.2. エクステリアカラー

エクステリアカラーは、全3色のカラーラインナップ (Fig. 29) を設定した。

新色 PREMIUM BRILLIANT GARNET M. は、所有感や高揚感を感じ、見る者をひきつける魅惑的なカラーとした。

WHITE ORCHID P. はクリーンで先進的、クラリティの未来感あるデザインを強調するカラーとした。

CRYSTAL BLACK P. はフォーマルシーンで使いやすく、上質感と落ち着きを感じさせるカラーとした。

それぞれのボデーカラーに役割を持たせ、厳選したカラーで新型 CLARITY のイメージを強く印象づけた。

5.2.1. 新色 PREMIUM BRILLIANT GARNET M.

先代クラリティの STAR GARNET M. は、環境車でありながらラグジュアリーさを感じさせる色であり、従来の環境車のイメージを一新させるカラーであった。新型 CLARITY においてもこの考えを継承し、さらに陰影感を高めることで造形の美しさを強調させたいと考えた。

新開発した PREMIUM BRILLIANT GARNET M. は、



Fig. 29 Color lineup

トップ層に高い発色性をもつ赤に着色した半透明塗装の効果により、鮮やかな発色と強い陰影が特徴である (Fig. 30)。光があたるハイライト部はより鮮やかに、シェード部はより深みのある落ち着いた色とすることで、立体感を表現した。BRILLIANT GARNET という名の通り、原石から磨き上げられた宝石のように内側から発光するようなカラーへ進化させた。

5.3. インテリアカラー

インテリアカラーにおいては、心地良く感じられる調和のとれた空間を目指した。デザイン開発初期から色や素材のコーディネートを決め、洗練された内装を実現した。

内装ラインナップは、シックでラグジュアリーなブラック内装、先進的で華やかなプラチナムグレイ内装の2色を用意した (Fig. 31)。どちらもシンプルな形状がより一層引き立つモノトーンのカラーコーディネートとした。

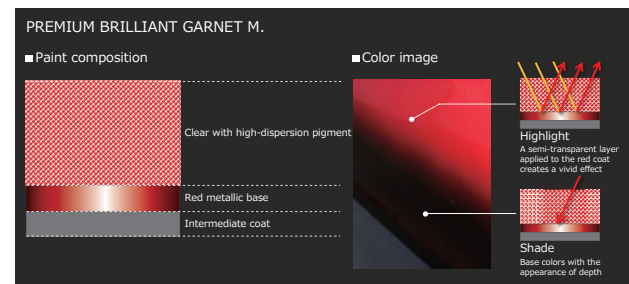


Fig. 30 Paint composition



Fig. 31 Interior color and material coordination

5.4. 環境に配慮した素材

新型 CLARITY では、環境に配慮した素材を積極的に取り入れた。リサイクル素材や植物由来の材料でありながら、上質感やクオリティの高さを感じる素材の開発をおこなった。

ルーライニングとフロアマットは、さとうきびの搾りかすを利用した植物由来ポリエステル糸を使用した。この糸は、シートやアームレストで使用している合皮の裏地にも採用した (Fig. 32)。

インテリアの特徴であるインストルメントパネルとドアパッドのミドル部の素材は、リサイクルポリエステルを使用したスエード調人工皮革を採用した (Fig. 33)。なめらかで心地良い触感と、あたたかみを感じる上質な素材感が特徴であり、インテリアの広面積に配したことで、包み込まれるような心地良さへ寄与した。

5.5. セダンとしての上質感

環境配慮素材と共に、セダンとしての上質な仕上げや細部の作り込みをおこなった。加飾の木目柄は家具や楽器の材料として知られるローズウッド材からベースのグラビア版を作成した。大らかで動きのあるローズウッド柄により上質でぜい沢な印象を演出した。フィルムでありながら木目の導管 (凹凸感) を立体的に表現したことで、触感からも木のぬくもりを感じることができる。また、加飾の

端末部にあたる部分にピンストライプのシルバー加飾を施し、木目柄がより一層引き立つコーディネートとした (Fig. 34)。

シートは、広々としたラウンジのソファのように、ゆったりと大らかに見えるように、1 カラーでコーディネートした。近くで見ると、細部まで手の込んだ張り分けやステッチ、センタのアクセントパーツが認識でき、上質に仕立てられていることを感じられるシートへ仕上げた。

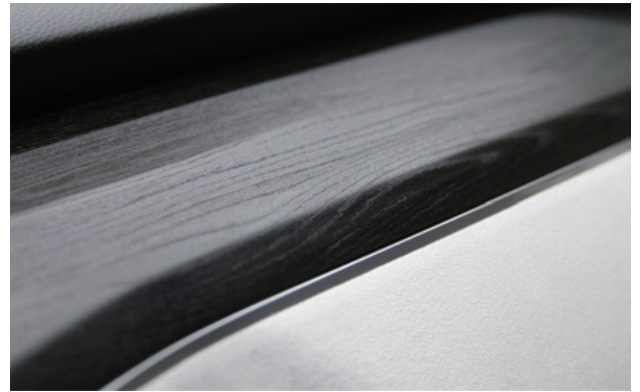


Fig. 34 Wood film panel

6. まとめ

次世代新環境車である新型 CLARITY のデザインにおいては、空力性能を骨格から構築し、環境性能の達成のみならず、お客様に喜ばれる FCV としての存在感や実用性、そして上質さを表現した。

アッパーミドルクラスのセダンに求められる居住性と実用性を重視し、内燃エンジン車とは異なった機構であるにもかかわらず5名乗車が可能となり、使い勝手はアコードと遜色ない。また堂々とした車格を表現するため、床下にバッテリーを搭載していながらも車高を低く抑え、ロー＆ワイドの美しいたたずまいを実現した。これに加えキャビンの絞込みとハイデッキ、前後輪エアカーテン機能により高められたエアロダイナミクスは新型 CLARITY の個性をさらに際立たせた。

またインテリアは FCV の特長である静かさと滑らかさの中で、広々としたくつろぎの空間を創出した。厳選した素材は肌さわりの良い感性に訴えかける上質なものでありながら植物由来によるもので作られ、環境負荷を低減させている。ぬくもりと落ち着きを感じさせる空間は、いつまでも乗っていただきたいような気持ちにさせる。

このように FC を搭載した新型 CLARITY が社会に浸透していくためには、数字では表すことができない感性や気持ちに訴えかける喜びや楽しさが必要である。Honda の企業姿勢として持続可能な社会を実現するためには、デザ

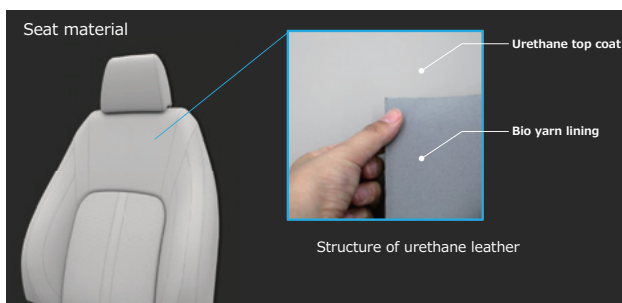


Fig. 32 Seat materials



Fig. 33 Artificial suede leather

インを通じてお客様に商品をより魅力的に感じていただく
ことが必要である。新型 CLARITY は、環境技術とデザ
インを組み合わせることで社会に貢献しお客様の気持ちに
こたえるものと確信している。

■著 者■



矢口史浩



小林 慧



佐原 健



富田沙希